Osaka Shoin Women's University Repository

「葵祭」

佐野寿子

薄曇りの五月十五日。

賀茂川のすばしこい清流に加えて、疏水がさわやかに、あるいはしっとりと流れる。

快い京都に着く。

交通警官の整備の中を、私達は御所に集合した。緑の深さに静まる御所が、でもこの日は観光客でうめられていた。

八〇七年、二十九代欽明天皇の時に始まり、嵯峨天皇八一九年に盛儀となった葵祭。曇り空の下、かえって透き通った空気の中で、さまざまな衣の色彩が、まずあざやかに私達の目に映った。王朝絵巻をひもとくごとく、行列が今、まさに厳かに続行され、千年来の伝統の宮廷風俗が現代京都の市街にくりひろげられる。

烏帽子に白丁を着て空脛を出した仕丁の姿、垂髪に奴袴をつけた小童の姿、そして緌をつけた冠をかぶって狩衣装束もいかめしく厚房かけた馬に乗ってしずしずと打たせ来る警護の人々の顔つきまでが遠い古の歴史を物語っているようだ。綱代車のぎいぎいとひしめく音に高貴さを感じ、冠につけた葵の葉がそのゆるやかな足なみに応じてゆらぐ様に静かなはなやかさを感じた。

ももしきや　ふるき軒ばのしのぶにも
なほあまりある　昔なりけり（順徳院）

とある。そのしのぶ昔の全盛が、この姿なのであろうか。

斎王女人列は、やはりあこがれる美しさであった。長く垂らした髪に十二単の姿は、きりっとした上品さとやさしい女らしさを含んでいる。行列は、そのあでやかさと品あるにおいを残して、なおゆっくりと通り過ぎて行った。

このお祭りで五穀豊穣を祈り、一心に国家安泰を願った当時の人々の気持、非科学的なそれでいて精一杯のつとめが、現代に生きる私達にも理解できそうな気がした。

京都——、自然の景色のきめの細かい美しさ、その歴史の層を成した深い密度、古来ここに住んだおびただしい人々の息ぶきは、生活や文化の中にしっかりと残っていて、私達の心をぐんと押す。

葵祭は、五月の豊かな日中にたゆたれ、人々の心によって大切に盛り上げられ、厳粛な威光を新しい京都に、古い都に、そして私達の胸に印象づけた。平安の歴史は、ここに生まれ育てられ、日本文化を強く飾っているのである。

誇り高い、その深い歴史をおおう、新しい京都の洗練された静けさに、何かを教えられつつ、私達もまたゆっくりと京をあとにした。（国二）